

## 加賀地方の子守唄

The Lullaby in the Kaga District  
of Ishikawa Prefecture

小林 輝 冶

## 一 はじめに

子守唄は、童唄にあっても、極めて特殊なジャンルに属することはいままでもあるまい。それは、近年、「五木の子守唄」や「竹田の子守唄」が、民謡として広く唄われていることによって明らかであろう。

しかし、私自身は、童唄を「子どもたちによって唄われる」ことを原則としながらも、「子どもたちのために唄われる」ものも入れているのではないかと考えている。まして、「五木の子守唄」や「竹田の子守唄」は、多く年少の子守娘によって唄われてきたことを思えば、いわゆる「民謡」として位置づけることの方が、問題がありはしないか。

したがって子守唄はまず、大人が子どもたちのために唄ってやるものと子守娘によって唄われるものとの二種に分類が可能である。

さらに前者は、すぐに眠らせることを目的とするか、気嫌よく遊ばせることを目的とするかによって分けることができよう。つまり、子守唄は、その唄われ方によって、

- (1) 眠らせ唄（寝かせ唄・寝させ唄）
- (2) 遊ばせ唄
- (3) 子守娘唄（守子の唄）

の三つに、一応分けられそうである。

今、右田伊佐雄氏の論稿（昭48・5「子守歌の分類と民謡における位置」）の一部を借りて、さらに(1)を細分化すれば、加賀地方においては少くとも次の五種になり、②・④が多い。

- ① くりごと唄（「オロン」とか「ねんねこ」などのことばをただくりかえすだけのもの。）
- ② ほうび唄（すぐ寝た子には、何かほうびを上げようと約束するもの。）
- ③ おどかし唄（すぐ寝ない子は、恐ろしいめにあうとおどかすもの。）
- ④ 家びと唄（家族、あるいはその一員と見なされるたどえば乳母や守子のことを唄いこんだもの。）

⑤ 教え唄 (おもに仏教的教えを説いたもの)

④は、注意をひくものとして、さらに次の三つを挙げるべきであろう。とくに1)・2)が多い。

1) 「里の土産」型 (里へ帰った守子が、たくさん子どもの喜ぶ土産をもつて帰ってくるというもの)

2) 「花折りに」型 (山へ花を折りに行って、「一夜を明かしな」といふもの)

3) 「金山」型 (金山へ働きに出かけ、三年目にやっと手紙が来てその消息がわかるといふもの)

(2)も、次の二つには分けられよう。

① あやし唄 (体を使って遊ばせるもの)

② 笑わせ唄 (おもしろい「口遊び唄」で子どもを笑わせようというもの)

以上の分類を用い、昭和五十二年から、現在もなお継続中の石川県児童調査の一部を、改めて「加賀地方の子守唄」として報告したいと思う。ただし、加賀四市十三町五村のうち、高松・内灘の両町については、子守唄の完唱者を見つけることができず、文献によったことをお断わりしておきたい。

なお、文献明記のないものは、一切、明治から大正にかけ、その土地土地で広く唄われてきたものを、直接現地に行き、原則として明治四十年前後に生まれた年寄りから聞き取って私自身翻字したものである。

## 二 眠らせ唄／その「悲しみ」

### A 北加賀南部 (金沢市)

#### ① くりごと唄

オロロン オロロン オロロンバー (寺中町)

〔注〕明治・大正の頃までは、金沢でもほとんどの女の子が子守を経験している。とくに在所では、「ねんねぼんぼして(赤んぼをおぶって)の意)、学校行きましたわいね。泣きゃあ、黙って外へ連れてってね」という年寄りは一人や二人ではなかった。そうやって唄われた一番短いものがこの子守唄である。くりかえすごとに、いろいろに節を変え、「バー」のところでは必ず振り返って子どもの顔を見たという。「オロロン」については未詳というより仕方がないが、たとえば狂言「葺(くさびら)」で懸命に祈る山伏が「ボロンボロンボロ、ボロンボロボロンボロ」とくり返しているが(昭36・10 / 岩波版「日本古典文学大系43／狂言集・下」参照)、金沢においても盛んであった山伏修験を考えると、その呪言とのなんらかの関係があるかも知れない。

オロロンベロロン オコロリヤ 背中の子どもはどこの子や

田辺の大事な大事な子、堅い者じゃ堅い者じゃ 寝てくれや

(東蚊爪町)

〔注〕「オロロン」に、もう少し即興的にことばをつけてうたったものである。「子ども」の所は、名まえを入れて「良坊(よしぼう)」とか「道子」とか唄うことも多かったという。「田辺の」という所は、姓や屋号がはいる。

#### ② ほうび唄

このほうびは、殆んど食べ物である。かつての農村の貧困が、そのまま反映しているかと思われ悲しい唄である。

• ねんねの寝た間に餅ついて 一つ食わせて太らいて、赤い茶碗に飯よそて 赤いお皿に魚よそて たんと食わいて 太らそ

よ(長坂)

・ オロロンバー オロロンバー、ねんねの寝たまに餅ついて食わす。オロロンバー オロロンバー、ねんねの寝た間に餅ついて食わす(新保本)

③ おどかし唄  
(金石)  
ねんね寝た間に何しようか、お粥餅ア手につく 団子よかる

④ 家びと唄  
1) 里の土産型  
ねんねの母はどこへ行った、鳥の山へ飯炊きに。飯が煮えたらはよござれ、赤いお椀に飯よそて 白いお皿に魚よそて。母の土産は何じゃいの、ピッピーガラガラ笙の笛 鳴らしてみたらば鳴らなんだ。(三社町)

〔注〕これは『金沢地方の童謡選集』(昭5・2/金沢市小中学校教育研究会読方研究部編)によって補ったものである。頭注に「よい子だよい子だねんねこせ」は「坊やはよい子だねんねしな」ともいうとある。

ねんねこさっせや宝の子 坊やはよい子だ寝んねしな、坊やのお守はどこへ行ったあ、どこどこ山へ金掘りに 金が掘れたかまだ掘れんか 一年経ってもまだござらん 二年経ってもまだござらん 三年三月にお状が来た、お状の土産に何もろたんでん太鼓に笙の笛(木越町)

ねんねこさっせや宝の子 坊やはよい子だ寝んねしな、坊やのお守はどこへ行ったあ、どこどこ山へ金掘りに 金が掘れたかまだ掘れんか 一年経ってもまだござらん 二年経ってもまだござらん 三年三月にお状が来た、お状の土産に何もろたんでん太鼓に笙の笛(木越町)

いづれも、いわゆる「江戸子守唄」のバリエーションである。こ

これは、宝暦明和年間に行なわれた江戸の童唄を集めたとされる行智編『童謡集』一巻によれば、次のように唄われている。「ねえ、んねんねこよ、ねんねのおもりはどこいたア、やませをこえてさ」といって、その御みやになにもろたんでん太鼓に笙のふえ、おきあがりこぼしにふりつづみ。」(明45・1/国書文芸叢書) 里の土産は、すべて子どもの喜びそうな玩具ばかりである。明治になっても殆んど変わらず、『あつまつ時代子供うた』(岡本昆石編)によれば、「ふりつづみ」が「犬張子」になったぐらいである。しかし、金沢のを見ると、買ってきた笙の笛が鳴らなかつたり、土産が鯉汁のついたご飯だったり、果ては金掘りの出稼ぎ先から手紙に添えておもちゃが送られてくるという、その一つ一つに感じられるわびしさは、やはり地方の生活の貧しさが、ストレートに唄いこまれたものと思われる。それだけに、「あの山越えて花折りに……里へ帰るに道も無し」という唄は、往時の人々の心の暗さ

を告げて極めて象徴的である。

なお、日露戦争後、こんな子守唄も、金沢ではやったそうである。

・ねんねんころれん ねんねこせ、坊のおとつあんはどこ行  
った 海山越えて満州へ、満州のお土産アいらねども おとつ  
つあんで無事で凱旋を (これを唄ってくれた丸つよさん「明27・2  
公に来て覚えた」  
ものだという。)

## 2) 「花折りに」型

この唄の構造は、大体七つに分けて考えられよう  
(昭3・3/柳田国男「鹿角郡の  
童謡」原題「花折りに」参考。)

(昭3・3/柳田国男「鹿角郡の

A・「花折りに」の誘い

B・「何花折りに」という簡単な反問と答

C・「花折りに」の途中で日が暮れる

D・山中に宿を見つけて泊る

E・早天に起きて空を見る

F・美女の出現

G・飲食

とりわけ、最後に関心のあったことは、その多様な地域のバリエーションによって明らかにすることができる。

・わらっち子ども 花折りに行かんか、今朝の寒いに何花折りに 牡丹・芍薬・菊の花折りに、一本折っては腰にさし

二本折っては笠にさし 三本折るまに日が暮れて、あっちの小屋へ泊ろうか こっちの小屋へ泊ろうか 中の小屋に泊ろうか あっちの小屋は餅つきで こっちの小屋は煤掃きで 中の小屋に泊ったら 蚤はくうし虱はくうし 蓆ははしかし夜は長し、

朝早よ起きて空見たら、雛のような女郎たちが 笹色の肴物きて 笹色の帯して笹色の草履はいて あっちようらり こっちようらり、巾着二匹拾うた くれていうてもくれんがな かせっていうてもかしんがな 甘酒いっぱい飲まいたら ちょろりと寄越いた(田島町)

・わらっち子ども 花折んに行かんか、今朝の寒いに何花折んに (このあと恐らく「牡丹・芍薬・菊の花折」)、一本折っては笠にさし 二本折っては蓆にさし 三本折るまに日が暮れて、行っても行っても宿が無い 鳥のお宿に泊ろうか 鳥のお宿は煤掃きで 雀のお宿に泊ろうか 雀のお宿は蓆がはしこて夜が長い、翌朝起きて天見たら、雛のようなお嬢たちが あっちにぞろり こっちにぞろり、ぞろりの拍子に 鎌倉筭落いたら 茶屋の谷からちよいと出て 拾うてくれというてもくーれんがかしていうてもかーさんが おまけに濁酒いっぱい飲まいたら ちようろりと寄越いた(東原町)

・わらっち子ども 花折りに行かんか、きょうらの寒いに何花折りに行く 牡丹・芍薬・菊の花折りに行く、一本折っては腰にさし 二本折って笠ね (「に」の) さし 三本折るまに日が暮れて、鶯のお宿に泊ろうか 鳥のお宿に泊ろうか 鶯のお宿に火は埋めて泊ったら 蚤はくうし虱はくうし 蓆ははしかし夜は長し、翌朝起きて空見れば、雛のような上臈が 足駄はいて杖ついて、御坊へ参れとおっしゃれば 魚がのうて参られぬ あんたの魚は何魚 ちゃんちゃん川に鮎三つ鮎三つ(二俣町)

〔注〕これも、最後「飲食」場面は忘れられてしまったと思われる。

因みに、『金沢地方の童謡選集』により参考までに類歌を引いておく。「向ひの小山に猿が居る 中の小猿がよう物しゃべる われら子供共花折りにいかんか 今日寒い何花折りに 牡丹芍薬菊の花折りに 一本折っては笠にさし 二本折っては腰にさし 三本折っては蓑にさし みえだくくに日が暮れて とんびのお宿に泊らうか 鳥のお宿にとまらうか とんびのお宿は餅つきで 品のお宿で泊まった 朝早く起きて空見たら 品のよい殿と品のない女郎と 笹色のばー着て笹色の帯して 前にちよきんと結んで 後へきりと廻いて さあ参りくとおっしやれど お魚無うて参りません 石のあはさ(間)のつくつくし 一つ食べて見たらばあんまり塩がからうて あなたの井戸を皆干して あなたの井戸も皆干して 皆干し皆干しと藪の中へはいつたら おながらぼーんと出ました 大仏は笑はっしゃる 小仏は泣かっしゃる 雀が摺鉢笠にきて摺子木杖につき あなたへぞろり ぞろりくくと参りました。」なお頭注に「石のあはさ……藪の中へはいつたら」の所を「われらの方のさかなは小鮎三つに鮎三つちよろくく川の鮎のすし、あんまり甘て食べたらば、おなががぼんとふくれて」という唄い方もあったことを記している。

いずれも、最後の飲食は、甘酒かどぶろく、せいぜいで川魚の鮎すし・鮎すしを思い描くこととどまっている。往時いかに人々が、粗食に甘んじていたかを改めて考えさせられよう。安政五年(一八五八)の夏、あの卯辰山に登り、城に向かって「ひもじいやあ」と叫んだという千余人の町人の声が、今も風に乗って聞こえてきそうである。

なお、この唄は加賀・能登において極めて広くうたわれていたも

ので、フォークロア作家ともいうべき泉鏡花にあっては、その作中にしばしば用いられてもいる(明<sup>36</sup>・5「薬草」等参照)。

〔注〕この「歌の背後に、農村予祝行事、あるいは若者の歌垣的習俗としての春山入り系の民俗を見ておいてよい」(昭51・7「わらべうた」)とは、真鍋昌弘氏の説だが、山中他界志向の色濃い反映もあるのではなからうか。というのも、能登の柳田・輪島で唄われたものを見ると、D以下は、明らかに一種のユートピア・浄土として作り変えられている。「上のお宿に泊ったら 風呂もチンチン沸いてます お膳は輪島の本塗りで 卵にくわいと椎茸と下にも置かぬもてなしで ついうかうかと日が暮れて 桜の花も散りました 一つの日に帰るやら ねんねこヤイヤイ(柳田)」「お宿がどこやとたずねたら この向こ小寺がそでござる 小寺をたずねて行ったらば お寺は人を助けるぞ お寺の奥さんおはいりと ああ有難い有難い(輪島)。

### 3) 「金山」型

「里の土産」型に、一部混入して唄われていたが、本来は手毬唄として金沢では用いられていたようである。

・己れの父親は金山へ 金が湧くやら湧かんやら 一年たつても状が来ぬ 二年たつても状が来ぬ 三年三月のお十五日の朝の六つに状が来た 起きて火をたき燈明を燈し 状の上書読んで見た 三人子供をどうしやった 一人は伯父親にあづけましょ 一人は叔母御に預けましょ 一人は縁にも付けましょ 縁に付けたる装束は あーかい小袖が七つぐら 白い小袖が七つぐら 帯やたぐりが十二筋 鉄漿おつばが馬に五駄 是ほど仕立てゝやるほどに ぬかれてござるな、のう姫子 去られて

ござるな、のう姫子 ぬかれて来うとも思はねど 去られて帰  
うとも思はねど 男の心と秋の日は 夜のまに七度日<sup>ナ、タビ</sup>に三度  
かーはるもの替るもの すっとんとん もう一つかやいて す  
っとんとん (『金沢地方の  
童謡選集』)

これも、出稼ぎの夫を待ち侘びる妻の心情を唄いこめたものであ  
る。子守唄とは、改めて往時の女たちの内面を深く説き明かしたも  
のを見ないわけにはゆくまい。

B 北加賀北部 (河北郡 津幡町・高松町・七塚  
町・宇ノ気町・内灘町)

② ほうび唄

- ねんねせいや ぼんぼせいや ねんねの寝たまに何しよう  
赤いきもん 縫うてやろ (昭49・10/高松町史編纂委  
員会編『石川県高松町史』)
- ねんねこ ねんねこせ ねんねの寝たまに何しよう おまま  
を炊いて 茶茶かけて 柳の箸に そろそろと (同右)
- ねんねこせ ねんねこせ ねんねの寝た間に餅ついて おき  
たら 持たせて よろこばしょ (同右)
- ねんねの寝た間に何をやる、盃もって来い 酒飲ます 酒の  
お菜はなんじゃった 牛蒡三切りに鮎三切り (七塚町)
- ねんねんする子には 赤い着物をよう、起きて泣く子には  
白い着物をよう、寝たか寝なんだかと 枕に問えばよう、枕答  
えて 寝たというた (宇ノ気町)
- 寝んねせや ぼんぼせや ねんねの寝た間に 何しよう 赤  
い着物縫うてやろ (昭57・1/内灘町史編纂  
専門委員会編『内灘町史』)
- 寝んねこせ 寝んねこせ ねんねの寝た間に 何しよう お

ままとたいて 柳の箸でそろそろと (同右)

③ おどかし唄

- 泣くな 泣くな 雀の子 泣くと餌差しが 指しにくる  
(『石川県高  
松町史』)
- 阿弥陀さまから お手まりもろた もろた手まりの いわれ  
を聞けば 薬師長者のはたくずに 信心の誠を うちまぜて  
かどでついても 南無阿弥陀仏 内でついても 南無阿弥陀仏  
ねんねを守りする唄うたへ ねんねよ こんこん 泣くなよ  
(同右)

〔注〕これは前に仏教手毬唄を付したものである。「ねんねを守りす  
る唄うたへ」とは「ねんねを守りする唄をうたってやるから」の  
である。「うたへ」のあとの「ば」が脱落したものとされる。  
しかし、これは他に用例もなく、便宜的にここへ入れたが、右田  
伊佐雄氏のいう「まもり歌 (Guarding Lullabies)」に該当す  
るものであろうか。

- ねんねや ねんね 寝んねこせ 寝んねこせぬと 尻つめる  
ああ 寝んねこせ (『内灘町  
史』)
- ④ 家びと唄

- こんのお守りは 上へ参る参ると 一里二里なら つれても  
参らりよが この長旅をお守り土産に何何買うや 一で朝顔  
二で燕子花 三で桜花 四で椎の花 五つ銀杏花 六つ木槿花  
七つ南天 八つ八重桜 九つこやし花 十で所の藤の花 (「里  
の土産」型/『石川県高  
松町史』)
- ねんねの子守はどこへ行った 山々越えて里へいった 里の

土産に何もろうた でんでんだいこに笙の笛 鳴らいて見たれ  
ど鳴らなんだ (同右/史) 『内灘町』

ねんねのお母は どころ行った、金箱担んで金山へ、一年経つてもまだ見えぬ 二年経つてもまだ見えぬ、三年三月にお状が来て ねんねに來いとのお状やった (「金山」型/七塚町)

C 南加賀東部 (松任市・石川郡野々市町・鶴来町・河内村・鳥越村・吉野谷村・尾口村・白峰村)

## ① くりごと唄

オロロンバー オロロンバー、オロロンバー オロロンバー

## (河内村)

オロロロ ロロロ、ねんねこせえや ねんねこせ (吉野谷村)

オロロンバー、おったかいなあ (尾口村)

## ② ほうび唄

ねんねこしられい とこしられえ、ねんねの寝た間に 餅ついて、一つ喰わいて 太(ふと)らいてーえ、背戸の細道 あるかいて、となりの「おば」へ行ったなら、錠かけ門(かん)かけ 入れなんだ、向いの「おばさ」へ行ったなら 可愛い「たから」を何んとしよう (昭41・2/上山秀之『河内風土記』)

ねんねの寝た間に 餅ついて、起きたら食わいて 目を覚ましよう、ねんねんよい子だ 寝んねしな、ねんねの寝た間に 餅ついて、起きたら食わいて 目を覚ましよう (鳥越村)

ねんねのねた間にボチ(餅) 搗いて 起きたら食わせて ぶとらいて 来年はたちになるといと 赤いば着せて 紅さいて 蛇の目の傘 さし上げて えっさら もっさら 嫁にやる

(昭56・10/鳥越村教育委員会編「ふるさとの唄こよみ」)

ねんねのねた間に 何しようか 赤いべ着ようか 帯しようか ひとりその間に早や起きる (同右)

〔注〕これは「ほうび唄」の形をとってはいるが、内容的には子守に無関係なことを唄っている。便宜的にここへ入れたが、右田伊佐雄氏の分類に従えば「ひとり歌(ひとりごと歌)」というところか。

ねんねこせえ 寝えせ、ねんねや寝えた間に 赤い飯しといて 魚添えて食わしよんじゃ、寝えせえ 寝えせ、ねんねや寝えた間に 赤い飯しといて 魚添えて食わしよんじゃ(尾口村)  
寝えせよう寝せよう 寝えせよう寝せよう、ねんねの寝た間に粥を煮て、母にもいっばいよそちよいた 父にもいっばいよそちよいた 爺にもいっばいよそちよいた 婆にもいっばいよそちよいた、ねんねにいっばい足らでやれ やれやれ業腹や腹立ちや、寝えせよう寝せよう 寝えせよう寝せよう (白峰村)

## ③ おどかし唄

固え子しとらんと 化物アつかまえてくぞ (尾口村)

## ④ 家びと唄

坊や かたい子やねんねしな、この山越えて里行って 里の土産に何もろた、でんでん太鼓に笙の笛 なるかならぬか判らぬが おまえにやるとてもろてきた、ならぬかならぬか吹いて みよ (「里の土産」型/鳥越村)

ねんねの守は どころ行った、あの山越えて 里へ行った、里のみやげに 何もろた、櫛や笄 かんざしや、伯母御にやると 貰ろてきた、伯母御が死なれて 今日で七日、七日七日の

墓まいり、墓のぐるりに 松植えて、松のぐるりに 砂まいて  
松の小枝に 鳥三羽、あの鳥や何鳥 とんべ鳥、あの鳥や何鳥  
からす鳥、あの鳥や何鳥 すずめ鳥、とんべは山へ トト(魚)  
焼きに、からすは山へ シリ(汁)たきに、すずめは背戸へ マ  
マ(飯)たきに、トトが焼けたら 早やござい、シリがにえたら  
早やござい、ママがたけたら 早やござい、茶釜ちんちん 沸  
きました(同右/『鳥越村教育委員会編』)

● 寝えせよう寝せよう 寝えせよう寝せよう ねんねの守りア  
どで行った、下坂越して里行った、里の土産は何じゃった、元  
結一輪に紙三帖 道場の前に置いたらば 道場の守りや取って  
って、返せつても返さず 寄越せつても寄越さず やれやれ業  
腹や腹立ちや、寝えせよう寝せよう 寝えせよう寝せよう(同  
右/白峰村)

● 向かいの山には 猿が三匹おるわいの、あっちの奴も物知ら  
ず こっちゃんの奴も物知らず、中の小さいこちびいのいうこと  
聞きなさい、お花折んに行くまいかあ、何花折んに 牡丹・芍  
薬・百合の花折んに、一本折つては腰にさし 二本折つては笠  
にさし 三本目に日が暮れて、あっちの宿に泊ろうか こっち  
の宿に泊ろうか 中の小さい宿屋に泊ったらば 簾ははしかし  
夜が長く、朝早よう起きて 空ア向いて見たら、美し女郎と汚  
ねえ女郎が 笹色な前掛して 笹色な帯して 前にしゃんと結  
んで 後へキリッとまわして、鷺々 わんの首ア何で長い ひ  
だるて長い、ひだるけりや三反田の田螺拾うて食わんせ 手が  
汚れる候、ジャンジャラ川行つて洗わんせ 流れる候、笹

の葉にとまらんせ 手や切れる候、膏薬買つてつけさんせ  
銭や無い候、借つてでもつけさんせ なされん候、そんならど  
うでもずりさらせ(「花折りに」型/松任市徳光町)

〔注〕「鷺々」以下は、本来は独立した「尻取り唄」として、広く県  
下に行なわれてきたものである。この徳光と同タイプの「花折り  
に」は河内・鳥越においても見られる(『河内村風土記』・『ふるさ  
との唄ごよみ』参照)。

● 隣の村から状が来た 誰に來いとどの状やいの 娘は今年はや  
られんぞ 来年はたちになるといと 白粉つけて 紅さいて  
箆筒長持かつがいて えんやらかんやら行くまいか(「金山」型  
/『ふるさと』の唄ごよみ)

D 南加賀西部(能美郡〔美川町・根上町・寺井  
町・川北町・辰口町〕・小松市・加賀市

・江沼郡〔山中町〕)

② ほうび唄

● オロロンバー ねんねこせ、オロロンバーねんねこせ、ねん  
ねの寝た間に なあにしょ(美川町)

● ねんねん寝た間に 何しようやら、赤い着物をしよか 赤飯  
しようか(寺井町)

● ねんねの寝た間に餅ついて 起きたら たべさそ ふとらか  
そ(昭31・2/川良雄  
編『寺井野町史』)

● ねんねんころりよ おころりよ、ねんねの寝た間に 何しり  
やよかろう、前掛しよっか帯しよっか 何しりやよかろう、そ  
ねにしとる間に早や起きる(川北町)

● ねんねんころりよ おころりやあ、坊やはよい子だ ねんね



しなあ、ねんねの寝た間に 何しようやらあ、起きりやすかいて  
また寝さす(辰口町)

《注》これは、一種の「ほめ唄」といった方がいかも知れない。

- ねんね寝た間に餅ついて、起きたら食わしてまた寝さしよ  
(小松市五国寺町)

《注》波佐羅町に育ったある中年の女性によれば、母親の子守唄は「

ねんねが寝るまで、寝んねの寝た間に「ただだった」という。

その場合、即興的に「おろろこしよう」・「まんま食ってよう」・

「縄ぬってよう」・「米ついてよう」・「ジャガたいてよう」・「粉こ

ねよう」・「畑行ってよう」・「スス払ってよう」・「頭結ってよう」・

……と続けて眠るまで静かに唄いつづけられたという。こうなれば、

これはもう完全な「女の一日」を語る「ひとり唄」というべきであらう。

- ねんねころりよ おころりよ、坊やはよい子だ ねんねし  
な、坊やの寝た間に餅ついて 起きたら一つ食べさせよ、ねん  
ねんころりよ おころりよ、京子ちゃん (寝させたい子の  
名まえを入れる) の  
寝た間に餅ついて 起きたら一つ食べさせよ(加賀市大聖寺耳  
聞山町)

- ねんねやねんね、ねんねの寝た間に 餅ついて、起きたら食  
はせて喜ばせう。べろろん、たろろん、旅の人 石をまくらに  
せん(せぬ)がよい。(昭54・10/加賀市史編纂委員  
会編『加賀市史通史』下巻)

- ねんねこねんねこ ねんねせえやあ、ねんねの寝た間に餅つ  
いて ついたらねんねに食べさせる、ねんねこねんねこ ねん  
ねせえやあ、目んめが覚めたら食べさせる(山中町)

### ③ おどかし唄

泣虫 泣虫、滓(「おから」)くれ。滓五合持たーいて、牛蒡  
の葉で包んで、長屋のあっち追いやれ追いやれ。(美川町)

### ④ 家びと唄

• ねんねころりよ おころりよ、ねんねのお守はどこ行った  
あの山越えて里へ行った、里の土産に何もろた でんでん太鼓  
に笙の笛(「里の土産」型/根上町)

《注》全く同じ唄われ方のものが『美川町史』下巻(昭54・10)にも  
美川で唄われたものとして掲載されている。

- ねんねころりよ おころりよ、ねんねのにやあにや(嫁)  
は どこ行った、あの山越えて里越えて、里の土産に何もろた  
でんでん太鼓に笙の笛、なるかならぬか吹いてみな、ねんねん  
ころりよ おころりよ(同右/川北町)

- おべろこおべろこ おべろこや、坊やの守はどっち行った  
あの山越えて里越えて 里の土産は何やった でんでん太鼓に  
笙の笛、ならいてみたらばならなんだあ、あれあれ、葉が沸く  
腹が立つ(同右/山中町)

- わっらわっら 花取りに行かんかや、なんの花取りに 牡丹  
・芍薬・菊の花取んに、一本折っては腰にさげ 二本折って  
は腰にさげ 三本目に日が暮れて、あっちの宿屋に泊ろっか  
こっちの宿屋に泊ろっか あっちの宿屋は煤掃きで こっちの  
宿屋に泊ったら、朝はよ起きて飯たいて 爺さん婆さん起き  
んなれ 茶沸いた、ドンドン叩くは誰さんや 新町角屋のお女  
郎様、今頃なんしに参りました 席駄が変って参りました あ

んたの席駄はどんな席駄 チャラチャラ紐の チョロ紐で 敷居にけつまずいて ステンコロリンと飛んでった(「花折りに」型/美川町)

## ⑤ 教え唄

• ねんねこしょうも 十三間、三間言うたら 喜びで、喜び心を あてにして、あてにするは 直命で、直命聞いたら 真心中、真心一つで 参るなら、参るは 弥陀のがん力なり

(小松市吉竹町/昭53・3/小松市婦人学級編「加南の民話」)

• べろろんさいこ とこさいこ、とことこ山のおちらには 仏たちが参られる、何を着せて参られる、絹や小袖を織り着せて、べろろんさいこ とこさいこ、旅の人 石を枕にさっしやるな、死んだ人こそ石枕、石を枕にせんもんじゃ。(山中町)

〔注〕やはり真宗王国の土壌なるがゆえにということであろうか、能登でもこの種の「教え唄」を門前・志賀岡町で聞いている。なお、金沢では「手毬唄」に残されたこの種のを採集したが、それはこういう歌詞である。「今度ひとたび初事に 阿弥陀如来にお手毬もろうた、もろうた手毬の味わい聞けば、若生者の綿くず つめて 四十八願千鳥掛、衆生かわいとせめてもみたり 衆生かわいとゆるめてみたり、せめてゆるめたお慈悲でござる、内でもついてもありがたや外でもついてもありがたや、さあさ皆さん つくまいかストントン ストントン。」

## 三 遊ばせ唄/その「笑い」

## A 北加賀南部(金沢市)

## ① あやし唄

• ここまでおいで 甘酒進上、あんよは上手 おころびお下(歩かせ唄/寺町)

• かいぐり かいぐり、魚の目(身振遊び唄/春日町)

• チョッチョッチョ アワワワワワ、ブルンブルンブルンブルン、かいぐり かいぐり かいぐり かいぐり、おつむテンテン バー(同右/新保本)

「眠らせ唄」が幼い子を寝かせつけることが目的だったとすれば、「遊ばせ唄」は、目がさめて退屈している子どもをあやすためのものだといえよう。

「ここまでおいで」・「かいぐり」は、共に古くから全国的に行なわれてきたもので、説明するまでもあるまい。しかし、天保生まれの年寄りが、孫娘を膝に置いていつも唄っていたという次のはどうであろう。歌詞の最後に出てくる「頭の子」というのは、雨に叩かれて「土の上に頭を出した青いズイキイモ」のことだという。

• 芋や芋や どの子がかわい、負うた子もかわい 抱いた子もかわい、雨に叩かれた頭の子がなにかわい(頭なで唄/小立野)

## ② 笑わせ唄

• 昨夜夢見た地獄の夢や 鬼が餅つきや閻魔さんがちぎる、鼻欠け地蔵が食いたがる われも食いたけりゃ手ったいせえ、手ったいしょうにも襷がない 隣行って借って来い、隣の婆々お茶婆々 かき餅焼くててへそ焼いて、その手でお釈迦の顔なでた お釈迦臭いてて鼻つまんだ(三社町)

• 昨夜夢見た地獄の夢見た 花咲かじじいが食いたがる、われ

も食いたけりや手ったいしやあれ 手ったいしようにも襷がな  
い、襷なけれりや隣行って借って来い 隣は報恩講や向かい行  
って来い、一軒隣のお茶ばあさ かき餅焼くててへそ焼いて、  
その手でお釈迦の団子こねて お釈迦具いとて鼻つまんだ(堅  
田町)

金沢にはまだ、笑わせ唄においても多くの種類が残されている。  
中にも、傑作の一つがこの唄であろう。仏教歌謡の視点からも、ま  
ことに興味深い唄である。

- 天竺天のおばさんが 子どもがおらいで淋しかる、二十日艸  
捕まえて 横座にちよっきん坐まらして、じいじの着物替えさ  
して ばあばの頭巾被さして、あなたの猫にも聞かしんなこ  
んたの猫にも聞かしんな、あなたの猫が ちよっこりちよっこ  
り聞き出して、頭を噛りむいた そりや見いさいな(二俣町)
  - 天竺のおばさんが 子どもがのうて淋しかる、二十日艸を捕  
まえて 元服させて髪結うて、赤い煙草入れ腰にさし 摺子木  
を杖にして 摺鉢を笠にして、鯛売りに出したなら 隣の猫が  
引っかいた(春日町)
  - 貂と鼬と 猫さえおらねば、 わたしや夜左衛門の ヒッチ  
ヤカドッコイ ヒッチャカドッコ(春日町)
  - 泣いた子はどこ行った、江戸まで飛んでった、江戸の子ども  
ん共ア 太鼓の棒でたたいた(月浦町)
- ところで、江戸時代から全国的に唄われ、しかも金沢でも最も人  
気のあったものといえば「お月さんいくつ」である。
- お月さんいくつ 十三七つ まだ年ア若い、ねんね生んで子

生んで 乳母さに抱かいて、油買いにやったらば 油屋の前で  
とっすべって転んで、油一升かやいた その油どうした、犬な  
なめてしもうた その犬どうした、殺いてしもうた その皮どう  
した、太鼓に張ってしもうた その太鼓どうした、燃やいてし  
もうた その灰どうした、昨夜の嵐と今朝の嵐で パッパと立  
ってった(旧市内/三社町)

- 空のお月さん いくつでござる お十三七つ、そりやまだ若  
い ねんねを生んで 小太郎に負わして、油買いにやったらば  
すべって転んだ、油一升かやいた その油どうした、あなたの  
犬と こなたの犬と 犬ななめてしもうた その犬どうした、か  
ち殺してしもうた その皮どうした、太鼓に張ってしもうた その  
太鼓どうした、燃やしてしもうた その灰どうした、麦にかけて  
しもうた その麦どうした、雁な食てしもうた その雁どうした、  
じいじの枕元と ばあばの枕元へ ポッポと立って行った(旧  
河北郡/木越町)

のんの様いくつ 十三七つ そりやまだ若い、ねんね生んで  
子生んで 乳母さんに抱あかいて、油買いにやったら 油屋の  
前で とっすべって転んで、油一升かやいた その油どうした、  
犬ななめてしもうた その犬どうした、かち殺してしもうた  
その皮どうした、太鼓に張ってしもうた その太鼓どうした、  
燃やしてしもうた その灰どうした、麦にやっしてしもうた そ  
の麦どうした、昨夜の嵐と今朝の嵐で パッパパッパと立って  
った(旧石川郡/寺中町)

注意すべきは、旧郡部(河北・石川両郡)では、穀類(麦)が必

ずと違ってよく唄われていることであろう。しかも多くは雁（「田町」では「鳥」と一緒に唄われ、かつての農村としての特徴が、その例があった。）と一緒に見られる。「のんの様」（「仏」の幼児語）については、旧市内・旧郡部の別は見られない。「月」の清浄さに打たれた者は、すべてそこに仏を見て、誰もが「のんの様」と唄ったようである。

### B 北加賀北部

#### ② 笑わせ唄

• アッリヤー やかましい子やなあ、ほんなに泣いってから住吉様から 天狗様来て連れてくぞ（津幡町）

• なんな様いくつ お嬢さん七つ そりやまだ若い、乳母どこ行った 油買いに使いに、油屋の前で とすべって転んで、油半分かやいて その油どうした、こなたの犬と あなたの犬とひんにぶってしもた その犬どした、殺いてしもた その皮どした、太鼓に張ってしもた その太鼓どした、燃やいてしもた その灰どした、麦にやっしてしもた その麦どした、雁な食ってしもた その雁どした、西の端へポトポトと立ってった（同右）

• 泣いた顔アどこ行った、宝達山へ飛んでった、また来て笑うた また行って泣いた（七塚町）

• お月様いくつ 十三七つ まだ年ア若い、お釜の前に子を生で その子がいくつ 十三七つ まだ年ア若い、車に引いて油屋にやったら、油屋の前に 氷があつて とすべって転んで油一升かやいた その油どした、犬にやっした その犬どした、殺してしもた その皮どした、太鼓に張った（同右）

• お月様いくつ お十三七つ、七重着せて 河原へ出せば、河

原のじよじよと 小川のじよじよが、一口食ては何経申す 二口食ては何経申す 三口めに桃の葉がおどる、どういうておどる、スッポハッパ 針山の針の糞（同右）

• お月様いくつ 十三七つ まだ年ア若いな、あの子を生んでこの子を生んで、瘦せた瘦せた 三日月様よ（宇ノ気町）

• 天竺のおっさまが 子供がおらいで淋しかる、田んぼのねずみを連れて来て 横座にちやんとねまらいて、赤いさせるを食わさいて 干鯛売りにやったらば、一文気長に売って来て、その錢で油買いにやったらば、油屋の前でとすべって 転んで油半分かやいた、その油どうした 犬がなめてってしもうた、その犬どうした 殺いて太鼓にはった、その太鼓どうした あなたの婆とこなたの婆と、鳴るというて叩く 鳴らんというて叩く、かち破って燃やいた その灰どうした、よんべの嵐と今朝の嵐で 西の方へ東の方へ、雁になってばいばいたってった

（「内灘町史」）

### C 南加賀東部

#### ① あやし唄

• 手つての用 はしかい用、麦食て 粟食て 米食て コチョコチョココチョコツ（くすぐり唄／野々市町）

• ガーガー あひる ヨチヨチ あひる、ガーガー あひる ヨチヨチ あひる、ここまでおいで（歩かせ唄／河内村）

• アーチヨイチヨイ、アーよしよしよし、チヨイチヨイチヨイハイハイ（同右／尾口村）

- チョッチョッチョッチョッチョッチョッチョッチョッチョ、かいぐりかいぐり、かいぐり、かいぐり、かいぐり、かいぐり、お頭テンテン、お頭テンテン（身振遊び唄／河内村）
- チョチ、チョコチ、チョコチ、チョコチ、かいぐり、かいぐり、かいぐり、アワワワワワ、お頭テンテンテン（同右／吉野谷村）
- ③ 笑わせ唄
  - 此ん度<sup>こた</sup> 嫁<sup>よめ</sup>ンに行く時は、朝はよ起きて顔洗うて、妻戸の明りで飯炊<sup>ま</sup>いて、じいさんばあさん、おひんなれ（「あいさつで「お」お茶がチンチン沸きました、ドンドン叩くは誰さまじゃ、新町角屋の女郎さんじゃ、今時<sup>いまとき</sup>何しにいらしたや、席駄<sup>ひざ</sup>が変わって参りました、あなたの席駄<sup>ひざ</sup>はどういう席駄、チャラチャラ紐<sup>ひも</sup>のチャラ紐じゃ、猫を追<sup>お</sup>うて、敷居<sup>しきい</sup>につまずいてストントン（松任市徳光町）
  - お月様いくつ 十三 七つ、そりやまだ若い、ニンニ産んで子産んで、オンバさにだかいて、おシゲにおわいて、油買いにやったら、油一升かやいて、その油どうした、犬なナメてしもたその犬どうした、カチコロイテしもた、その皮どうした、太鼓にあってしもた、その太鼓どうした、燃やいてしもた、その灰どうした、表にまいてしもた、その麦どうした、ガンな食てしもたその雁どうした、西ポッポ、東ポッポ、たつていった、すみからすみまでまいてった、三国三国まいてった、三国屋の娘さんお釜の前で子産んで、着物を一枚拾うてきて、洗い場で洗うて、いっすん場でいっすんで、干し場で干いて、吾が子に着せれば他人<sup>ひと</sup>の子がミミル、他人の子に着せれば、吾が子<sup>ひと</sup>がミミル、一、
- 二、三（松任市米永町／昭55・2／松任郷土研究会編「松任の民話と民謡②・婆々白の神」）
- 《注》これは厳密には「あやし唄（顔遊び唄）」に入れるべきだが、歌詞の比較上便宜的にここへ入れておく。「いっすん場」は「ゆすぎ場」のなまり、「ミミル」は「ニラム」の方言である。「お月さんいくつ」を「にらめっこ」に使ってるところがおもしろい。
- お月様いくつ 十三七つ、まだ年ア若い、一日二日、二日のなかに、七重<sup>ななかさ</sup>着せて、お馬に乗せて、川原へやったらば、橋の下のどじょうと、川原のどじょうと、お強<sup>つわい</sup>飯申して、われも一つ食べてみよ、お前も一つ食べてみよ、シッポハッポ、はるまの林へポッポと立ってった（野々市町）
- かあかあ、とおとお、ごーざいの、かさんととんばア、見いえる、早くごーざいの（鶴来町）
- 《注》「かさんととんば」というのは、頭にかぶる「笠」の編みはじめが、笠の上に「とんぼ」のように二つ飛び出しているところから名付けたもの。方言。
- お月様いくつ 十三七つ、そりやまだ若い、ねんね生んで子生んで、おんばさあに抱<sup>だ</sup>かいて、油買いにやった、油屋の街道<sup>かいど</sup>でとすべって転んで、油一合かやいて、その油どうした、隣の犬<sup>いぬ</sup>と前の犬と、ペタペターとなめちゃった、その犬どうした、かち殺いてしもうた、その皮どうした、太鼓に張ってしもうた、その太鼓どうした、燃やいてしもうた、その灰どうした、昨夜<sup>よんべ</sup>の嵐<sup>かぜ</sup>と今朝<sup>あさ</sup>の嵐<sup>かぜ</sup>で、ポッポと立ってった（同右）
- にかにや行ってらっし、行ってらっしゃい、やーやー、お嫁になって行く時は、櫛<sup>くし</sup>やかんざし、しほんにさして、大黒じんまど

うく (『河内村  
風土記』)

〔注〕「にゃにゃ」は、きちんとした日常語としては「にゃあにゃあ」、姉さんの意の方言である。「大黒じんま」は「大黒爺じいま」の意か。

・ お月さん幾つ 十三・七つ、ねんね産んで子産んで おじさんにだかいて、川原のおちよこに お強飯(こわ)をむいて、誰よけ(多く)読んだ、一丁ぎっちょ 二ぎっちょよ、三丁ぎっちょ 四ぎっちょよ、四の半 中に もう半 とりこ、七方 八方 はるまの林、こやけの小太郎、何社(なんしゃ)本社 はるまの毛(同右)

治 輝 林 小  
・ おとと(魚)のじょんじょ(鱒)、おこわ(強飯)蒸いて 誰々よぼる、ひんだりぎっちょ みぎっちょ 三ぎっちょ 四ぎっちょよ、五羽の中に 六羽の鳥が 七羽(ヒツパ)八羽(ハツパ)はりまのはやし、こうやの小太郎、こたつへころんで こべんばち(額)こがいた (鳥越村教育委員会編)「ふるさとの唄ごよみ」

・ あんさま出て見さっせいま、うちの背戸の さんしよの木に 鳥が三羽 巢かけた、雀か 目白か ひよどりか、チンチク チュウチク さえずって、一さいどうなら おんちよこちよんの わしげどり(同右)

・ お月様いくつ 十三七つ まだ年ア若い、ねんね生んで坊生んで 油買いにやったら、油屋の庭で とすべって転んだ、油一升こぼいた その油どうした、犬アねぶった その犬どうした、かち殺いて燃やいた その灰どうした、昨夜よんべの嵐けさと今朝の嵐で パツパと立ってった(鳥越村)

〔注〕隣の吉野谷村でもほぼ同じものを採集している。ただ、ここで

は油を買いに行くのは「お美代」という娘であり、終わりも「パツパとまいた」と唄っている。

・ お月さんいくつ 十三七つ、お久米はどうした 油買いにいった、油屋の前で とすべって転んで、油一升こぼいた その油どうした、犬なひんなめて行った その犬どうした、かち殺いて太鼓に張った その太鼓どうした、太鼓に張った その太鼓どうした、皮屋に売った 皮屋にやどうした、太鼓に張った その太鼓どうした、お寺の小僧が あっっちゃ向いてドンドコドン、こっっちゃ向いてドンドコドン(尾口村)

・ お月さんいくつ 十三七つ まだ年ア若い、二文の銭ぜんで ぶたごの端はなへ、油買いに行って すべって転んだ、油一升こぼした その油どうした、単ねまがなめた その単どうした、猫によこめがなめた その猫どうした、犬いんめが取った その犬どうした、かち殺いてしもうた その皮どうした、太鼓に張った その太鼓どうした、あっちへ行ってでもデンデンデン こっちへ行ってでもデンデコデン、デンデコ デンデコ デンデコデン、こわれてしもた その太鼓どうした、叩き割たたきってしもうた その欠片かけどした、杓子しやくしに作しった その杓子どした、あっちへ行ってでも飯まよそい こっちへ行ってでも飯よそい、へし折しってしもた その欠片どした、囲か炉裏ろへきべてしもうた その灰どした、灰屋へ売った その金かねどした、爺いさんと婆ばあさんと 飴買あめうてペーロペロ(同右)

〔注〕ほとんど変わらないものが『白峰村史』下(昭34・4/白峰村史編集委員会編)に載せられている。ここではさらに方言臭が強く、「ねずみ(兎)」は「ねずめ」、「いん(犬)め」は「いりめ」

になっている。

- ピュウリ キュウリ バンドウリ いしなのはだかなずくずくし 塩入れて味噌入れて煮たらば あんまれ 塩がくどて馬にくれても いやいや 牛にくれてもいやいや いやいやでおいたらば 隣のよめじゃ ながたかりにびゅつときて おこの椀に十六杯 ただの椀に十六杯 十六杯十六杯飲んだらば あんまれ喉が渴いて この井戸も吸いほし あつてな井戸も吸いほし 吸いほし吸いほし 飲んだらば あんまれへーがこきとて 前な小ごやの破れどへ すっぺんぽんとこいたらば <sup>おぼ</sup>大ぼとげは泣かっしやる 小ぼどげは笑わっしやる どうなすずめもあんまり肝つぶして 播鉢をかさにきて <sup>すりこぎ</sup>播粉木をつれについて あの谷ざらり この谷ざらり ざらめく中は ちくちくぼうし 一にっちょ 二にっちょ 三にっちょ 四にっちょよ したのはの中に こいけがちどる じっぼ はっぼ はるまのはやし でんでんくるま さいたこ さかんこ まんだよう さきそろわん かつらのは <sup>(『白峰村』史)下</sup>

D 南加賀西部

- ① あやし唄
  - たもとに饅重があつたとき、隣の単が コチヨコチヨーツと食べてった(くすぐり唄/美川町)
- ② 笑わせ唄
  - まんまんだあいくつ お十三七つ、七笠かぶって お馬に乗って 油買いに行ったらば、油屋の街道で油一升こべいた その油どした、犬な来てなめてった その犬どした、かち殺いて

しもた その皮どした、太鼓に張ってしもうた その太鼓どした、燃やいてしもた その灰どした、昨夜の嵐と今朝の嵐でポッポーと立ってった(美川町)

《注》「まんまんだ」は、金沢等に見られた「のんの様」あるいは津幡町の「なんな様」と同じく、仏の幼児語である。なお、美川町の別の地域では「お嬢さん七つ」「津幡町」でも」というのを聞いたが、これは「お十三七つ」のなまったもので、新しいものと思われる。石川は全県「十三七つ」で、「十三一つ」(大阪・和歌山)・「十三九つ」(鳥取・島根・岡山・広島・香川・愛媛)おもに瀬戸内地方)の事例は見つかっていない。

- のんの様いくつ 十三七つ そりやまだ若い、竹筒に水入れて たもとに米入れて 飲み飲み 噛み噛み 道で子を生んで 乳母さに抱かいて 油買いにやった、油屋の店で油一合こぼいた その油どした、犬ななめっしもうた その犬どした、かち殺いてしもうた その皮どした、太鼓に張ってしもうた その太鼓どした、燃やいてしもうた その灰どした、麦にまいてしもうた その麦どした、雁な食てしもうた その雁どした、今朝の嵐と昨夜のこかしで ポッポッポーと立ってった(根上町)
- じいじいばんばあ 慳貧じゃ、なんばア百 三文じゃ(寺井町)

《注》子守たちが連れ立って在所を廻りながらくり返し唄ったものという。

- のんの様いくつ 十三七つ まだ年ア若い、おばアさ 畑からおりて、ねんねまを抱いて 油買いに行つて油半合こぼいて その油どした、犬な来てなめた その犬どした、かち殺いてし

もた その皮どした、太鼓に張ってしもた その太鼓どした、燃やいてしもた その灰どした、麦にやっしてしもた その麦どした、雁な食てしもた その雁どした、向かいの山へ ポッポと立ってった(同右)

● お月様いくつ 今やと七つ、乳母<sup>おんぼ</sup>さに抱<sup>だ</sup>かいて 油<sup>け</sup>買えにやったらば、油屋の庭でとすべって転んで 油一升かえした その油どうした、あなたの犬<sup>いん</sup>とこなたの犬とベタベターとなめてった その犬どした、殺いてしもうた その皮どうした、太鼓に張ってしもうた、その太鼓どうした、燃やいてしもうた その灰どうした、昨夜<sup>よんべ</sup>の嵐と今朝の嵐で ポッポと立ってった(川北町)

〔注〕「今やと七つ」も「お十三七つ」が意味の面から合理性を求めて変化したものと思われる。なお、同町に明治二十七年に生まれた丸つよさんによれば、始まりを「日(ひい)様日様」で唄ったというが理由はわからない。今後、検討すべき問題かと思う。

● お月さんいくつ 十三七つ まだ年ア若いに ねんね生んで子生んで、その子を乳母<sup>おんぼ</sup>さに負<sup>お</sup>わいた 油屋にやっした 油買いにやっした、油屋の背戸で油一升こぼした その油どした、犬<sup>いん</sup>な皆ねぶった その犬どした、殺いてしもた 皮屋にやどした、太鼓に張った その太鼓どした、お寺へやっした お寺にやどした、お寺の坊なん ドドンがドーンとついた それからどした、燃やしてしもた その灰どした、昨夜<sup>よんべ</sup>の風と今朝<sup>けさ</sup>の風で ポンポラポーンと立ってった(小松市大野町)

● お月さんいくつ 十三七つ まだ年ア若いに あの子を生

んで この子を生んで、だあれに負わしよ お万<sup>まん</sup>に負わしよ、お万はどこ行った 油買いに茶買いに、油屋の前で とすべって転んだ 油一升かやしてその油どうした、犬がベタベターとなめた その犬どうした、皮屋にやっした 皮屋にやどした、太鼓の皮に張った、その太鼓どうした、あっちゃ向いてドンドン ドン こっちゃ向いてドンドン(加賀市今出町)

● お月さんいくつ 十三七つ まだまだ若いこっちゃ、乳母<sup>おんぼ</sup>どけった 油買いに酢<sup>す</sup>買いに、油屋の前ですべって転んで 油一升こべた その油どした、犬<sup>いん</sup>なペロペロとねぶってしもうた、その犬<sup>いぬ</sup>どうした、かち殺いてしもうた、その皮どうした、皮屋へ売った 皮屋などうした、太鼓に張った その太鼓どうした、燃やいてしもうた、その灰どうした、灰屋へ売った その金どうした、家の太郎坊<sup>たろう</sup>と隣の次郎坊<sup>じろう</sup>と 飴<sup>あめ</sup>買うてペロペロ 砂糖買うてペロペロ(山中町)

#### 四 子守娘唄／その「怨み」

旧郡部では、六つ七つから十二、三までは子守が当り前だった。とくに食べていくことの困難な山村では「口べらし」のために、近くの町へ子守に出される娘が多かった。白山麓ではチカマ(「近い」と思われる)といわれる鶴来・金沢・小松へ出て行ったという。寒くなれば「肌<sup>かわ</sup>ぼんぼ(「肌でじかにあたためなご)しながら、人の軒下でいつまでも日を送る。そうした辛い子守を忘れるためにいつかうたわれたのが「子守娘唄」であったといえよう。そこにあるのは、



誰への怨みであったか。

### A 北加賀南部（金沢市）

- 鳥なんて鳴く 女郎屋の屋根に、金も持たずに カオカオと  
／子守かわいや 沍寒ごかんの冬も、人の軒端のきはで 日を暮す（旧河北  
郡／才田町）
- ねねま寝てくたんせ 寝る子がかたい、起きて泣く子は面憎  
い／ねねま泣くまっしやんな 泣く子の守は、泣けば子守の  
身が立たぬ（同右／大場町）

- 泣いてくれるな 雀の子ども、泣けば餌差しが竿出さおしやある  
／庭に立てれば ねにや泣くし、居間おひに立てれば 親おやござる  
（同右／木越町）

- 落ちてくれるな 落しはせんぞ、落ちて阿弥陀の 身が立た  
ん／坊や泣きやただ 抓つかるかと思うが、ねんね口ある 役で泣  
く／娑婆しやばでせんこと 一つもないが、一番ひどいもんは子守  
の役じゃ／人目には楽そで 辛いもんな子守、ねんねの泣き場  
で 日を暮す／ねんね泣く子は 山へやる、山に猿居さるおる 山へ  
やる（旧石川郡／大桑町）

- この子よう泣く 何で泣く子やら、泣けば気が張る ご主人  
に（同右／打木町）

### B 北加賀北部

- いやじゃ いやじゃ 泣く子はいやじゃ 泣けば気がはる  
両親ふたおやに（『内灘  
町史』）

### C 南加賀東部

- ねんねこ寝まっしやあれ 寝た子はかわい、起きて泣く子は  
面憎めんぞういーい／兄さま いらしたあか 足の湯をとるかあ、酒の  
爛かんしよかあ 床取るかあア／姉あねにやま姉にやまと 呼ぼるは誰  
だあ、連れの姉にやまか 兄さまかあア／坊ばんさま山道 破れた  
衣ころもで、行きつ戻りが 気にかかるうウ／こんな家には 二年と  
居おれぬ、小童こわら痛める 女郎めらせせーる（松任市徳光町）

- 七つ八つから子守に出たら 小童こわら痛める女郎めらせせる／親の無  
い子のあのだま見され 裾そでを結んで肩にかけ／こんこん今夜は  
早おか祭（十二月十五日、雇い人）仕舞しもて行くわいね親のそば／  
こんな泣く子の守まもりこさいやや 泣いて泣きつく郵便箱／泣いて  
泣きつく郵便箱に 親のたよりを聞きたさに／今年ことしやこうでも  
来年からは 好いた兄あにまと田圃たんぼする／ねんにや泣く役 守まもりや  
かす役、せめて片親ひなかござりや良い／守まもりというもな哀あはれなもんや  
盆ひなと祭まつりにただ半日（鶴来町）

- ねんね寝てくれ、ねてさえくれりや 寝た子も楽ぢや 守り  
も楽し／今年やどうでも、来年からはー好きなお方の、機は（は  
た）を織るー／ねんね泣くなや、泣く子は嫌い 泣けば泣くほ  
ど、きらわれるー／ねんね泣け泣け、泣く子は知らぬ 盆ひなが早  
よくりや 早よかえるー／ねむの花咲きや、ぎおんの盆ひなじゃ  
あとの盆ひなまで、三度咲くー／盆ひなは踊るか、泣く子を捨て、  
赤い紅緒が、切れるまでー／花も十六、盆ひなから先きは あんに  
やま衆やまもろの、仲間入りー（『河内村  
風土記』）
- ねんねの かわい子を 誰や泣かいた 誰も泣かさぬ ひと

D  
南加賀西部

り泣く／ねんねねんねよ ねる子が可愛い 起きて泣く子は  
面憎い／ねんね泣く役 守やすかす役 泣かぬ子供にゃ 守ゃ  
いらぬ／こんな泣く子の 守するいやじゃ もっと泣かん子の  
守したや／ねんね泣きやただ わたしにあてて おかか田圃  
から 見にござる／ねんね可愛けりゃ 守可愛がられ 守が外  
へ出りゃ 子にあてる (鳥越村教育委員会編  
『ふるさとの唄ごよみ』)

・ 今からあつちの 守やいやじゃ 足が冷たし 子が泣くし  
庭に行きゃ とうとに めめられる うちへ行きゃ かあかに  
叱られる 納屋のげんかに腰かけて あっち向いてはほろほろ  
と こっち向いては ほろほると (『寺井野  
町史』)

・ 守りをしりゃ、ただ乞食のように思て こじきでない 行儀  
直し／ウチ(生家) へ行きまし、親の顔見たし、あたり近所の  
人見たし／親のないもな(者) 道ばた草よ、人は見さげる ふ  
みつける／ネンネ 寝てくれ 寝る子は可愛い おきて泣く子  
はつらくい／雨の降る日と 日の暮れ方は 思い出すわに

親里を (昭52・11/木下健次編『小  
松地方わらべ歌集』第一集)